

## 1 概要

### リスク管理と事業実施／安全なスポーツ事業への取り組み

令和7年度も引き続き、よりリスクの低い事業推進に注力し、各事業を実施して行く。

別紙事業日程表の通り各大会を開催する計画であるが、地元諸機関との調整を経て今後計画変更となる可能性もある。ウェブサイト等を通じて情報発信のうえ、加盟校や関係者との連携を図って行く予定である。

### 競技力

日本の自転車界全体の競技力向上に資する活動を行っていく。

・ナショナルレベルで活躍し、世界に通用するところの、競技者、コーチ・スタッフ、コミッセル、連盟スタッフ、ジャーナリストといった周辺領域を含めた人材の育成

・関係者の智力・人間力の増進

・競技力の源泉である「チーム」「クラブ」力の強化

・国際大会の日本における開催数増大による国内競技のレベルアップと UCI ポイント獲得

世界選手権・オリンピックについては、メダル数が最も多く競合状況が比較的緩やかであったトラック種目も、近年の競合環境激化により相対的にメダル獲得も容易でなくなっている。当連盟としては世界的シーンでのメダル獲得につながるトラック種目を重視しつつも各領域にわたり世界に通用する競技者育成を図っていくことが肝要と考えられる。ロード種目はトラック選手としても基礎力強化に必須の種目として取り組んでいく。

### 本連盟登録選手数

「安全な事業推進には一定水準の競技技術が求められる」こと、その事業推進には加盟校の理解と協力を前提とした「事業運営への参画分担（当番校制度の拡大、供出学生役員の義務付け）」が欠かせない。これらを理解、クリアした水準のチーム・選手を維持するためには、選手出場のハードルが上がることは、ある程度やむを得ない事であり、今後は登録選手数を無尽蔵（無造作）に増やす事は必須では無いと考えざるを得ない。これらを前提として、登録選手数の増加、競技力・運営力の双方においてよりバランスのとれた適正規模を求めていく。

### 競技中・練習中の安全の確保

は常に重要な命題である。競技用自転車に乗る人の数が増えることは競技の振興にとって基本的に好ましいことであるが、他方、道路における歩行者・自動車等との共存のバランスに変化をきたしてきている。公道をお借りして行われる自転車競技の特性に鑑み、マナーとルールへの遵守の徹底に関して、本連盟登録校競技者は社会の規範となるべきライディングを日常より目指す。

練習中の交通事故では、被害者にも加害者にもなるリスクがある。自転車競技が安心して取り組めるスポーツとなるよう、各クラブでのコーチ・監督の育成や、大学にはじめて競技を始める競技者への講習会等の実施を推進していく。また JCF との情報交換・人的交流を深め、学連独自の対策と同時にナショナル・レベルでの普及・安全対策の充実にも取り組んでいく。そのためにも、チーム運営に携わる者のコーチ・指導員・チームアテンダント資格取得を義務付け、資質の向上を図っていく必要がある。一層高い水準で選手・チーム指導者・審判層を構築していく。今後も、当連盟出身競技者、コーチ・審判など選手を支える周辺領域で活躍が重要で期待される連盟であることを望むところである。

補助金は、減少の比率は一時期よりは若干弱まったものの引き続き減少傾向であり、加えて支給審査は厳格化されている。本連盟は継続的な自主財源拡大大策により徐々に補助金依存体質からの脱却をはかりつつあるものの、依然としてトラック大会・本格的選手権大会を中心に大会開催にあたっては補助金依存度が高い。補助比率低下に備えた財務体質改善が引き続き必要である。その基礎となるのは何を於いても、自転車競技の発展に情熱と愛情を注ぐことをいとわぬ幅広い人々の協力であり、とりわけ OB・OG の金銭的・時間的・マンパワー的協力体制をより広く確固たるものにしていく必要がある。

ロードバイクに乗るサイクリスト人口は確実に増加しており、また各地の地方公共団体や財界は自転車を軸とした街の活性化に期待を寄せている。競技人口増加は競技連盟の施策次第、非常に明るい未来があるともいえる。学生スポーツとしての基本的な魅力を磨きつつ、社会的存在価値のある運営を通じて本連盟憲章の定める目的であるところの学生自転車競技の健全なる発展に向けて、引き続き事業運営に取り組んでいく。

## 2 国際大会の開催／参加

- ・**世界選手権・ネイションズカップ**

国際大会参加資格対象ポイント大会への本連盟競技者の参加・上位入賞を促進する。

- ・**アジア選手権ロード&トラック**

トラックレース、ロードレース共に本連盟競技者の参加・上位入賞を促進する。

- ・**世界大学選手権**

2026年の開催が予定されているが詳細不詳

- ・**U23 ネイションズ・カップ：**

JCF 派遣方針と連携しつつ、本連盟競技者派遣を積極的に働きかける。

- ・**明治神宮外苑大学クリテリウム：**

都市型ロードレースの代表的イベントとして一定の位置づけを得ている。海外大学チームの招待参加により、競技レベルの向上と国際交流を図ってきたが、見直しの時期に来ている。

- ・**トラック・UCI クラス2 国際大会**

JICF 国際トラックカップの開催を通じて、本連盟競技者の世界選手権・五輪参加可能性を高めるべく、オムニウム、マディソン等を実施し UCI ポイント獲得機会を拡充する。全日本学生選手権オムニウム大会を兼ねる。韓国・香港・台湾など周辺諸国との交流促進を兼ねる。

- ・**日本国内の国際大会**からの招待ある場合は、積極的に対応する。

## 3 国内主要大会への参加

学生競技者の技量向上・実力発揮の機会を捉え、積極的に国内開催主要大会に代表選手を派遣する。また、選手の強化育成のため、選抜チーム派遣も検討する。

- ・**全日本選手権トラック、全日本選手権ロードレース：**

本連盟登録選手の出場・活躍を推進する。

- ・**トラック国際大会**

派遣選手を多く送り出すよう努力する。

- ・**その他の日本国内開催国際大会：**

(大分アーバンクラシックなど) 本連盟宛推薦依頼・出場依頼あった場合、選考委員会にて検討のうえ代表選手を選考・派遣する。

## 4 選手権大会の開催

- ・**全日本大学対抗選手権（インカレ）：**

オリンピック種目であるオムニウム、マディソンを男女ともに正式種目として継続する。トラックとロードは日程をわけて分離開催とし、ロードを群馬県・群馬サイクルスポーツセンターにて「分割開催」する。トラックは会場調整中。

- ・**全日本学生選手権ロードレース：**

長野県木曾郡木祖村コースにて開催する予定である。

- ・**全日本学生選手権トラック：**

長野県松本市美鈴湖自転車競技場にて開催する。

- ・**チームロードタイムトライアル：**

例年通り、利根川沿道で開催する。スタート/フィニッシュ地点は旧おとね童謡ふる里室前予定。

- ・**個人ロードタイムトライアル：**

チームロードの翌日に、選手権大会として同場所にて実施する。

- ・**全日本学生クリテリウム選手権：**

ツアーオブジャパン最終ステージ日の午前に東京都大井埠頭にて行う予定。

- ・**東西学生選手権トラック：**

2日間開催として開催する。

## 5 強化・普及大会の開催

### ・ロードレース・カップ・シリーズ（RCS）

シリーズ戦はこれまで主として地方連盟と連携して企画され、学生競技者の大会参加機会増大・地域における自転車競技活性化の両面において一定の成果をあげており、選手権大会の参加資格を持たない選手にとっては参加資格を得る機会数の増大、すでに参加資格を持っている選手にとっては実戦レースに於ける技量の高揚の効果があり、近年の新規加盟校・新規登録選手の増大にも寄与していると考えられる。

2005年に東日本学生クリテリウムとして2戦で始まったシリーズ戦は、年間約10数戦程度でここ数年安定してきているが、運営の確実性の確保の観点から、開催数を一部見直し、絞っていく可能性がある。

これまでに引き続き、主管団体との役割分担・費用構造の明確化や、**当番校制度の確立**、ラウンド毎の競技運営方法・質のばらつき安定化など、運営方法の標準化・質と安全性の向上を図る。

### ・ロードカテゴリ制

2008年度に導入された、実力別にクラス1, 2, 3, に分類する制度は、選手権大会参加時までのレース経験度が上がり、選手権大会の安全性・競技レベル向上と、学生自転車競技全体の活性化に一定の効果があったと評価できる。本年度もこのロード選手のカテゴリ制度を基本的に継続する。選手権大会の参加資格としてはクラス2以上を原則とする。また、**大会参加資格において、ロードカテゴリ制と、安全講習会・研修会受講実績を掛け合わせた方法を導入する。**

### ・トラックレースシリーズ

ポイントレースを積極的に取り入れる。また集団スタートのトラック種目の参加基準に、トラックレースシリーズ戦の成績を導入する。

安全に関する講習の受講を義務付け、大会参加の条件とし、主催者にて実施する

## 6 加盟校・登録選手

規模の拡大はスケールメリットはあるものの、一方で幅広いニーズへの対応や、競技レベル差の拡大への対応負荷も増大する。今後は規模の拡大よりも、**安全志向や大会の共同運営といった共通の価値観を共有できるクラブによる円滑な連盟運営と、一定の競技スキルと安全志向マインドを持つ登録者の増加を目指す。加盟審査にあたっては、形式要件にとどまらず、当番校としての貢献度など実績面も評価を行っていく。**

## 7 安全性の向上

新規加盟校の増加、各校における登録競技者の増加は喜ばしいことであるが、他方でビギナーレベルの競技者を大会に多く迎えることを意味する。こうした情勢の変化を受け、上部組織の安全対策指針なども含め本連盟としても安全性の維持・向上をはかるべく、引き続き以下のような施策を継続導入する。

・登録すれば誰でもレースに出られる 訳ではなく、**一定の知識・スキル・マインドを持ってから参加する**

・安全講習〔座学〕の義務化

・安全研修（実技）の義務化

・アンチドーピング研修の義務化

・チーム指導者研修制度の創設：経験者の少ない、もしくはいないチームにおいてチーム指導者の育成を図り、また伝統校においてもチーム指導者の資質を向上させるべく、ミーティング&レクチャー形式の研修制度を創設する。

・ロードレースにおけるフィニッシュ地点の安全策の強化徹底

・セフティマネージャの設置

## 8 コーチ・監督資格の取得促進

2013年度から国民体育大会は監督としての大会参加には日本体育協会公認指導員(注)・コーチ資格保持が必須条件となった。本連盟としても、加盟チームのコーチング力の向上に際して資格取得を要件とすることは一定の効果期待できることから、インカレでは日本スポーツ協会公認指導員(注)もしくはJCFチームアテンダント資格所持を監督の必要要件としている。チームアテンダント講習会を実施し、チームスタッフの基本的知識・技量の向上を図ることとする。

(注)2013年度 当時は「日本体育協会公認指導員」、現在は「日本スポーツ協会公認コーチ1」の名称であるが、両者は同資格内容を指す。

## 9 事業運営

当年度役員により運営されることとなる。大会準備会合は毎週水曜日夜の定例会議を軸に進め、「常務理事会」を併催しながら、Web併用で実施する。

近年、大会エントリー等、加盟校からの提出書類において、ミスや遅れが多発し、事務局運営に支障をきたしている。運営に支障をきたす行為のあったチームに対する制裁は、金銭ペナルティを科してきているが、繰り返しトラブルを起こすチームもある。そうしたチームに対しては、大会出場を制限するなど、より厳しい対応が必要ではないか、ということが議論される段階に来ている。

また、ドーピング違反や安全性にかかわる重大な走行違反があった場合など、本連盟として、リスクの拡大に歯止めをかける措置が必要ではないか、ということも検討対象である。

組織形態としては、一般社団法人化やUNIVAS加盟も、具体的な時期を想定して取り組むべき段階にきている。

**(審判業務)** 審判業務は大会運営の重要な要であり、一定の資格要件と経験を必要とする分野である。その人材の確保は長期的視点に立脚し、加盟各校による応分の負担と努力によってのみ実現される。

**(感染対策)** 新型コロナウイルスの感染はピークを過ぎたと思われるが、他の様々な感染症が引き続き存在している。これまでの知見を生かし、必要な範囲で対策を継続する。

**(広報活動・協賛金募集)** 一昨年度より広報委員会体制を強化し、各メディアへの情報発信に努めているところである。より一層の各校OB・OG・関係者の協力をお願いしたい。

**(普及・強化)** JCF・高体連との連携強化を図りつつ、大会・練習時の安全性の向上、選手のライディング技能の向上、指導者の指導スキルの向上と情報交換の活発化を図る。

**(学生委員)** 登録は全校に義務づけられているが、とりわけ大会上位入賞校からの積極的な学生委員の派遣、当番校大会での積極的役割分担が期待される。

**(当番校制度)** 当番校制度のローテーションに近年加わった学校やRCSを含め、活性化をはかる。

**(アンチドーピング)** 大会における検査、講習会による啓発活動を進める。

**(表彰)** 年間ランキングにより、最優秀選手表彰を行う。慶弔規程に基づき、国際大会参加者には祝金を贈呈する。

以上